

中国における「知識青年回顧録」現象を評する

——『図説北大荒』の評論を兼ねて——

王 幼 敏

[訳] 村上牧子

はじめに

「文革」終了後、大量の冤罪・でっち上げ事件・誤審案が見直され、過去の政治運動で迫害を受けた多くの人たちが解放された。そういった人たちが自分の身に起きた出来事を述べ、歴史を記録した多くの回顧録を出版したが、その中で二種類の人たちの回顧録が人目を引く。一つは迫害を受けた人々の回顧録である。特に反右派闘争の中で右派とされた人々及びその子女が著した回顧録であり、筆者はこれを「右派回顧録」と称する。例として戴煌の「九死一生」や章詒和の「往事並不如煙」等が挙げられる。二つめは政府で要職にあった元革命家の回顧録であり、筆者はこれを「老幹部回顧録」と称する。例として薄一波の「若干重大決策与事件的回顧」や李銳の「廬山会議実録」等が挙げられる。これら二種類の回顧録は、それぞれが中国社会における二つの重要な集団の置かれた状況を著しており、回顧録を書きまくる独特な二つの集団が出現した。同時期についての集団による回顧及び著作活動といった現象は、中国の歴史上一度も出現したことが無い、未曾有^{みそ}の現象である。又、この二種類の回顧録の他に、もうひとつの別の集団の人々が書いた回顧録が出現しており、これこそが「知青回顧録」というものである。

「知青回顧録」は「右派回顧録」や「老幹部回顧録」とほぼ同時期に出現した三種類目の集団記憶の記録であり、同じ社会に存在するもう一つの重要集団ともいえる「知識青年」の歴史を述べている。近年、知青による回顧録の出版はますます勢いを増し、ある意味で一種の社会現象となる様子を呈しており、いままでに何千種類もの回顧文集が出版されている。上海知青歴史文化研究会により編集出版された「中国知青図書要目」の記載だ

けでも、その数は既に2672種類にも達しており、多くの回顧録の中でも群を抜いている。「右派回顧録」及び「老幹部回顧録」の作者の多くは知名人であるため、出版されると社会的に注目を集め読者も多く、学界でも歴史研究向けの参考文献として取り上げられることが多い。ところが「知青回顧録」の作者は普通の人々であり、それらの回顧録はほとんど重視されてはいない。例えば知青とはどういった人々の集団であるのか？ 彼らはなぜ農村に行ったのか？ どのように行ったのか？ 彼らは農村で何をしたのか？ 彼らはどのような考えを持っていたのか？ 彼らはなぜ回顧録を書くのか？ 回顧録の中で何を言っているのか？ 彼らは現代社会にどのような影響を与えているのか？ 筆者はこれらは探究に値する問題だと確信し、その研究意義は大きいと考える。

一、上山下郷運動

「上山下郷運動」政策は20世紀の50年代に既にあったものだが、文化大革命の時期になり大きな運動に発展し、その対象はいずれも知識青年であった。

1. 「知青」の定義

「知青」は「知識青年」の略称であり、以前は広く「文化程度が高く知識のある青年」を指したが、これはその字ずらの意味の理解であり、当然ながら大学生もその中に含まれる。「現代漢語詞典」の解釈によると、「学校教育を受け、一定の文化知識を備えた青年で、特に20世紀60～70年代に農村或いは辺境で農業生産に参加した都市部の知識青年を指す」となっている¹⁾。ここには二つの要素があり、つまり「学校教育を受けた」とことと「都市部の青年」ということである。これに対し現在「知青」史を研究している学者は異なった言い方をしており、例えば定宜庄は「知青」の定義につき、「知青とは特定の歴史背景のもと生まれた特殊な集団である。知青とはかつて学校教育を受け、その後の上山下郷運動という特殊な政策下で政府の組織のもと農村に行き農業に従事した青年を指す。」と述べており、強調すべきは、「政府が組織」した上山下郷（山に上り農村に下る）という「特殊政策」があったことである。定氏は特に「ここでの学校とは、小学校・中学校を指す」と示している。というのも当時は大学と中等専門

学校（一般的に「中専」という）卒業生に対しては就業に際し国による統一分配が行われ、たとえ農村に分配されたとしても国から給料が支給される制度となっており、農民になるということはありえなかったからである²⁾。定氏はここにおいて「知青」を中小学生と明確に限定しており、大学生と中専生は除いている。ここで説明しておきたいのは、定氏の解説は中国の20世紀50年代の状況についてであり、当時中国の教育や文化は非常に遅れていたために小学校卒業生までも知識青年の範疇に含んでいるということである。また、定氏は「知青」の定義は広義と狭義に分かれているとも述べている。広義の意味での「知青」とは、上の学校に進学できないために国の呼びかけに応じ農村に下った青年を指し、それには元来農村出身の青年で卒業後出身地に帰り農業に従事した「帰省（回郷）青年」を含む、通常言うところの「回郷知青」のことである。定氏は、「回郷知青」は実際は中国の「知青」の中で人数が最も多いのだが、「知青」とは取り扱われず、政府による「知青」配慮政策の対象外となっている人々であると示している。狭義の上での「知青」とは、1962年以降国が正式に「上山下郷」を就業の一種とみなした関係で、国から移転費用を支給され、大中都市から農村に下った中学高校の卒業生である。その中でも、文革中に中学高校を卒業した所謂「老三届」及びその後続いて中学高校を卒業した都市部の青年が「知青」の主体となっている³⁾。所謂「老三届」とは、文革が起こった時にちょうど中学高校に在学していた中学生と高校生を指している。彼らは本来であれば1966・1967・1968年に卒業しているはずであったが、文化大革命の突然の勃発により、大学入試・授業及び卒業が次々と中止となり、これら三期の学生たちは学校に残ったまま文化大革命を続行することとなり、この状態は1969年に「上山下郷運動」で農村に下り、農業生産に参加するまで続いたが故に、社会では彼らを「老三届」（即ち66期・67期・68期）と名付けたのである。当時全国の都市部の中学高校生はおおよそ1250万人とされており、そのうち高校生は137万人、中学生は1113万人であった。「老三届」は1947年から1953年までの間に出生しており、文革勃発時には13歳から19歳、上山下郷時には16歳から22歳となっていた。彼らは中華人民共和国と同年齢の、新中国の教育を受けた世代であり、まさに「新中国に生まれ、赤旗の下で育った」世代である⁴⁾。

以上からわかるように、「知識青年」の各種解釈と定義は大同小異であり、時代の変化と共にそれなりの変化を経てきたものである。本文が探る「知

青」の範囲を、「学校教育を受け、一定の文化と知識を備え、20世紀60～70年代の文革期間に都市部より農村に下り農民となった中学高校の卒業生」と定義し、「回郷知青」は含めないものとし、その数は10年間で約1700万人に上った。

2. 紅衛兵から知青へ

周知の通り、1966年から1976年は中国の文化大革命の期間であり、この革命の最も激しい時期は開始時期の3年、つまり1966年から1968年の間であった。これは「老三届」の在校期間と一致し、「文革」中の紅衛兵運動は主に彼らにより行われ、紅衛兵の主体も彼らであった。1966年5月に中共中央が文革を発動する「五・一六通知」を下し、5月29日には北京の清華大学附属高校の学生たちによる紅衛兵組織が成立し、学内に大字報(壁新聞)を貼り、革命造反活動を開始した。毛沢東は7月31日に清華大学附属高校を支持する手紙を送り、これをきっかけに紅衛兵運動は全国的に推し進められることとなった。これと同時に6月に北京第一女子高と北京第四高校の学生たちもそれぞれ党中央と毛沢東に大学入試を廃止すべく要求した手紙を出し、党中央と国務院は6月13日に「高等学校入試制度の改革についての通知」を発し、1966年における大学学生募集業務を半年延期し(その後1977年まで延期)、大学入試制度を廃止することを決定した。又同時に全国の大学・高校・中学で授業をストップし革命に取り組むことも決定した。8月18日になると毛沢東が軍服に身を包み、天安門上で全国各地から北京に集まった100万人の紅衛兵を接見し、女子学生が毛沢東の腕に紅衛兵の腕章を巻きつけ、以後3ヶ月の間に相次いで7回、あわせて1100万人余りの紅衛兵を接見した。これを契機とし、紅衛兵たちは毛沢東を彼らの「赤い司令官」と讃え、紅衛兵運動は疾風怒濤の如く全国を席卷し、文化大革命の炎が轟轟と燃え上がった。

文化大革命という「パンドラの箱」を開けたことで、文化教育・農工業生産や各種業種は猛烈な打撃を受け、全国は混乱状態となった。紅衛兵と労働者の「造反」ブームは休むことなく止めるすべもなかった。党内の「走資派(資本主義の道を歩む実権派)」を打倒したのち、庶民セクト間の分裂が盛んに起こり、セクト同士の争いが頻発し、全国が内戦状態に陥った。毛沢東の計画ではもともと1967年には文革を取束させる予定であり、67年には「革命大連合」や「授業に戻り革命を続けよう」といった指示が矢

継ぎ早に出された。その目的は人々をもとの工場や学校に戻し、正常な秩序を復活させることにあった。しかしセクト主義が阻害となり、「大連合」は遅々として実現せず、これには毛沢東も焦りを覚えるようになり、10月には「造反派のリーダーと紅衛兵たちに告げる、今こそが君たちが誤りを犯す時期だ」との耳の痛い言葉を発するまでになった。実際、造反派のリーダーと紅衛兵たちはセクト主義をおこし、毛沢東の戦略部署を妨害するという過ちをすでに犯していた⁵⁾。10月14日、党中央は再度「授業に戻り革命を続けよう」の通知を発し、全国の大学・高校中学・小学校に向け一律授業を復活するよう要求した。

中学高校が再開したのち、厳しい問題が突出してきた。つまり、文革が勃発してまもなくすべての大学が学生募集を停止し、小学校から中学へ、中学から高校への進学も同時に中断され、これら卒業生の進学の道が完全にふさがれてしまっていたことである。また、学校は再開したものの、実際状況として教師は批判を受け、新しい教材もなく、学生は勝手気ままに一年余り過ごしてきた結果情緒不安定となり、「授業に戻る」ことなどとても不可能な状況であった。もう一つの状況としては「文革」が引き起こした大動乱により、1967年と1968年には連続して生産が大幅に滑り落ち、農工業の生産は13.8%も下降したことである。各地の国営企業はセクト争いに明け暮れ生産どころではなく、新しい労働者を募集することなど全く以て考えられなかったのである。このように中学高校の卒業生は都市部での就職の道は閉ざされてしまっていた。1968年になり、1966・67・68年の三期卒業生はすでに1000万人余りに達し、卒業生の仕事分配の問題は一刻の猶予も許さない問題となっていた。進学の道は閉ざされ、国民経済は引続き衰退の一途をたどり、膨大な人数に膨れ上がっていた卒業生の出口はどこにあるのか？ 事実上「老三届」卒業生は既に都市の余剰労働力となっていたのである⁶⁾。

1967年下半年以降、中学生高校生たちの状況は非常に憂慮するものとなっていた。強烈な造反欲と破壊欲、そしてリーダー欲が一旦刺激されると、容易にはもとに戻すことができないものである。次の政治闘争が再び彼らを必要とはしなくなった時、大中都市に群れをなす何百万人の手持無沙汰で、何者をも恐れない青少年たちは、いかなる都市、いかなる社会にとってみても非常に恐ろしい破壊力の集団となりえる。1968年前後、彼らの一部は既に犯罪の道に手を染め、重大な治安問題を引き起こしていた。

彼らは学ぶすべがなく、働くすべもない苦しい境地に置かれていた。都市に留まっていた青少年たちは、潮のように溜まれば溜まるほどあふれ出し、急いで流してやらないとあっという間に決壊してしまい、その結果は想像のつかないほど恐ろしいものであることは周知の事実であった。この期に及び、意思決定者は多くを考えることは不可能な状況であり、ここで文革前に青年就職の「切り札」として使ったことのある「上山下郷」が時運にのり再びまきおこったのである⁷⁾。

1968年12月22日の「人民日報」に毛沢東の「知識青年は農村に行き、中下層農民の再教育を受けることはとても必要だ」という最新指示が掲載され、全国に「上山下郷」の高揚が巻き起こった。わずか半年という短い期間に400万人もの「老三届」知識青年が農村に送られた。こういった大規模な人口移動がこのような短い期間に秩序整然と行われたことは、まるで世界の人口移動史上の奇跡としか言いようがない。これを始めとし、1976年「文革」の終了までの間に、全国で1700万人の知識青年が「上山下郷」として農村に向かった⁸⁾。

「文革」期間のこの「上山下郷」運動は、「文革」前の「上山下郷」施策とは異なり、主に下記の相違点が挙げられる。

まず、「文革」前の上山下郷の規模は小さいものであり、そのほとんどが「回郷知青」であった関係で、影響はわずかなものであった。ところが「文革」期間の上山下郷運動は1700万人に達するほどの大規模な運動であり、何万何千という都市・村々に、何万何千という家庭に波及し、中国の一世代全体に大きな影響を与え、「知識青年」というこの世代の代名詞は、中国の歴史にその名を残すこととなったのである。

二点目としては、「文革」前に動員された上山下郷は、自発的であることが原則であり、一般的には「勸告指導」の形式をとった。例えば、1957年に国家主席の劉少奇が農村に赴く知識青年との対話の中で下記のように話している。「君たちは農村に行っても同じように明るい前途が待ち受けている。というのも農民たちは農作業ができるが、農村に行けば君たちもできるようになる、逆に農民は文化程度が低いが君たちは高い、加えて農民たちと関係を良くすれば将来的には君たちは幹部や社長や郷長や県長にもなれる、もっとすごければ中央に来ることもできる、大学生より強いじゃないか。」

ところが、「文革」中の上山下郷への動員は強制的な性質を持っていた。

例えば、いつまでも農村に行かずに様子見をしていた一部の「老三届」の学生たちに対し、國務院副総理兼北京市革命委员会主任であった謝富治が動員大会で「君たちに言うておくが、いつまでごねても（農村へ）行かなくてはならない。10年は仕事を募集しないし、兵隊にもなれない、いつまで待っても無駄というものだ。」と公開で述べていることから見て取れる⁹⁾。

三点目は、「文革」前の上山下郷は国が明確に認めた一種の青年就職先手配方法の一つであり、都市部の青年就職問題を解決するための一つの方法であった。これは1955年共青团中央が党中央に出した報告と1957年劉少奇と知青の対話の中で「今後一定期間内、国は卒業生の都市部での就職問題を解決する能力に欠けており、農村に行くしかない¹⁰⁾と率直に述べていることからわかる。これは主に経済面に重きをおいた発言であり、比較的現実に目を向けた発言である。ところが「文革」期間中の上山下郷はそれとは異なり、まず政治が先にあり、知識青年には「再教育」を受けるという使命を授け、国民経済の大幅な下降という事実には口を閉ざし政治のみに目を向け、表面的には政治は経済的意義より重要であるという姿勢をとっていた。

二、毛沢東の教育思想とプロレタリア革命事業後継者育成

毛沢東が1968年12月に「知識青年は農村に行け」の最新指示を発し、「上山下郷」運動の巨大な波が巻き起こった。毛沢東は最新指示の中で知識青年は「中下層農民の再教育を受けること」と述べ、更に「これは大いに必要なことだ」とも述べている。毛沢東はなぜこのような指示を出したのだろうか？ このような大規模な「上山下郷」運動はなぜ起こったのだろうか？

筆者は、このように考える。つまり「文革」期間、国民経済は崩壊の瀬戸際に追い込まれ、何千何万人にも達する中学高校卒業生の就職問題解決は不可能であったという経済的原因と、都市の社会秩序を回復し全国を安定させるといふ政治的原因の他に、毛沢東の教育思想とプロレタリア革命事業の後継者を育成するという意図が大いに関係しているのではないだろうか。これにつき下記二つの方面から述べてみたい。

毛沢東の教育思想には、知識人に対する見解・農民に対する見解・肉体

労働に対する見解・教育への見解・学習への見解等々多くの観点が含まれている。

まず、知識人に対する見解であるが、1942年5月毛沢東が延安にて発表した有名な観点を紹介したい。つまり、「最も清いのは農民労働者である。彼らの手は黒ずみ足の裏には牛糞がこびりついているが、それでも資産階級やプチブルの知識人よりは清いのである」¹¹⁾毛沢東はこれは自己の思想改造と感情変化の結果であると述べている。この話の中で、毛沢東は知識人を「プチブルジョア」であり、農民は知識人より「清い」と定めている。

中華人民共和国が成立し十数年経っても、毛沢東は新中国の知識人たちに依然として不満であった。1966年5月に「学制の短縮と、教育の革命が必要である。資産階級知識人が我々の学校を治める現象はこれ以上続けるわけにはいかないのである」と指摘した¹²⁾。此処に到り毛沢東は知識人を「資産階級」と定めている。

次に農民への見解である。上述の「農民は知識人より清い」という話の他に、毛沢東は一貫して中国革命における農民の作用を肯定してきた。早くは1927年に「湖南農民運動考察報告」の中で「貧農がいなければ革命は起こらない。貧農を否定するのであれば、それは革命を否定することに等しい。もし貧農を打ちのめすのであれば、それは革命を打ちのめすことに等しい。」「貧農は最も革命的である」「貧農は最も共産党の指導に従う」と述べている。

引き続き毛沢東の労働・教育・学習・思想改造等方面の見解を探るべく、いくつかの論述を挙げてみたい。

1955年12月、毛沢東の河南のある合作化経験の報告に下記の言葉を寄せている。「小学校中学校の卒業生を組織して合作社の仕事に参加させよう、これに特に注意すること。農村に行って働けるような知識人は喜んで農村へ行かなければならないということだ。農村は広大な新地であり、そこでは大いにやりがいがあるものだ。」有名な「農村は広大な新地であり、そこでは大いにやりがいがあるものだ。」¹³⁾のスローガンはここから出たものであり、この一段はその後どの知識青年でもすらすらとそらんじることができるほど浸透した。注目すべきは中学生と高等小学の卒業生も「知識人」の範疇に含まれていたことである。

1957年2月、毛沢東はある講話の中で「我々の教育方針は教育を受ける者が徳育・知能・体育の各方面で発展を遂げさせることであり、社会主

義の自覚を持ち教養のある労働者を育成することである。」¹⁴⁾と述べている。又、1958年毛沢東は天津大学視察中の談話の中で「教育は無産階級政治に奉仕し、労働生産と結合させなければならない。勤労大衆は知識化させ、知識人は労働化させる。」と述べた。1958年9月中国共産党中央と国务院の「教育従事者についての指示」では、この二つの話の内容を全国統一の教育方針としている¹⁵⁾。この二つの話は教育と政治、知識人と労働の関係の問題を提起し、特筆すべきは、ここで示す「知識人の労働化」の「労働」とは「肉体労働」を指すということである。

1964年2月13日毛沢東が春節座談会での講話中に「科目が多いのであれば半分を削ってしまえ」、「型にはまった勉強をするだけで、試験では敵に向かうように学生にあいたい相対することは害を与えるだけだ、これらは改善すること。現在の方法では人材をだめにし、若者をだめにしてしまう。自分は賛成できかねる。」「学制・カリキュラム・教育方法・試験の各方面を変えなければいけない」と指摘した¹⁶⁾。

1964年7月7日毛沢東は甥の毛遠新との対話の中で「階級闘争は君たちの主要な科目である」、「階級闘争を知らずして大学卒業と言えるのだろうか」と述べた¹⁷⁾。

以上の発言は、毛沢東が当時の教育制度に不満であり、学生に階級闘争を学ぶべきだという課題を出していることを表している。毛沢東は独学で才を成した天才革命家として、教室での書物を教えることを主とする教育制度には当然納得が行かないはずであった。史料によると、毛沢東は青年時代教室で教える数学・科学・美術・英語といった科目が嫌いで、授業を逃げ出したこともあり、学生は自分が興味があり得意な科目だけを学ぶ権利があると考えていたようだ。毛沢東は1912～13年にかけての半年余り、図書館で自由に本を読んで過ごした時期を一生忘れられず、大きな収穫を得たと言っている。又、毛沢東は親友の蕭瑜と夏休みを利用して徒歩で農村の調査にも出かけている¹⁸⁾。ここから毛沢東が教室での学習を軽視し、独学と実践を重視していることがおぼろげに窺える。毛沢東はその後、自己の成功した経験を全国の青年学生たちと分かち合い、この成功の途を複製したかったのかもしれない。又、文革中の青年たちが崇拜しお手本としたのは、まさに青年時代の毛沢東であり、「革命家」が紅衛兵たちの理想の職業となった¹⁹⁾。

1968年7月から9月にかけて、毛沢東は矢継ぎ早に3つの報告に対し書

面指示を行い、教育改革について3本の最新指示を出した。

7月22日の「人民日報」に、毛沢東が前日に上海工作機械工場の調査報告に対して出した書面指示の「大学はやはり開くべきだ、ただ私がここで言っているのは主に理工系の大学は開くべきだということである。但し、学制は短縮し、教育には革命を起こさないといけない、無産階級政治が指導的地位に立たなければいけない…(省略)…実践経験のある労働者や農民の中から学生を選ばし、学校で何年か学んだあと再度生産の実践に戻るように。」という内容が掲載された。これが有名な「七二一指示」であり、多くの工場がこの指示に基づき「七、二一大学」を開設した。

9月5日の「人民日報」には、毛沢東が上海機械学院の調査報告に出した書面指示の「ここで1つ問題を出そう。過去に大量の大学高校中学の卒業生が現在仕事に従事しているわけだが、注意しなければならないのは彼らに再教育を行うということであり、彼らと労働者農民を結合させることである。」という内容が掲載された。

9月12日には「人民日報」と「紅旗」雑誌に毛沢東の最新指示を引用した文章が掲載された。それは「旧制度の学校で育成された学生の大多数は工農兵(労働者・農民・兵士を合わせた言い方)と結合することができ、有る者は更に発明・創造できる。しかし正しい路線の指導の下で、工農兵は彼らに再教育を行い、徹底的に彼らの古い思想を変える必要がある。このような知識人を工農兵は歓迎するはずである。」²⁰⁾というものであった。

以上の1968年の3本の「最新指示」は2つの重要な信号を発している。一つは、大学は再開するが、学生は労働者や農民の中から選抜する方法に変更する。以前のように高校卒業生が入試を受けて直接進学する方法は採らず、まず先に「実践経験」を得ることが必要とされた。この「実践」とは生産実践と労働実践を指す。毛沢東は「理工系大学を再開すること」と特に示しており、文系大学については明確に述べていないことから、自己の経験に基づき文系は独学で才をなせると考えていたのかもしれない。もう一つはここで初めて「再教育」という言葉が出現したことであり、知識人は必ず「工農兵」による再教育を受けなければならないこととなった。これからも分かるように、知識人は以前の「工農兵との結合」といった相対的に平等の地位から「再教育される」という不平等な地位へと転落したのである。この「再教育」方法はこの後の僅か何か月の間に知識人から中学高校の青年学生たちに広げられていったのであった。

1968年12月21日、毛沢東は「知識青年は農村に行き中下層農民の再教育を受けること、これはとても必要なことである。都市部の幹部とその他の人々に対し、自分の中学高校大学を卒業する子女を農村に送るよう説得し、動員すること。各地農村の同志は彼らを歓迎すること。」の指示を出した。これは12月22日の「人民日報」に発表されたが、大学生には触れてはいるものの、実際に主な動員の対象となったのは、当時中学高校に積み残されていた400万人の「老三届」の中学生高校生であった。このように知識人への「再教育を行う」という重責の担い手が、労働者階級から最も信頼できる同盟軍の農民へとすり替わっていったのであった。

労働者、主として農民を使って知識青年を改造する、これは毛沢東の一貫した思想である。前にさかのぼること1946年に、毛沢東はソ連から帰国した長男の毛岸英にこのように言っている。「お前はソ連の大学に入ったがまだ延安の労働大学に入ったことは無いな。」これは、息子に農村に行き農民に学ばせたく思っていたことを示している²¹⁾。毛沢東が農民は知識人を改造させる力量を備えていると信じていたのには歴史的な原因があった。毛沢東は農民家庭の出身であり、共産党内でも公認の「農民革命運動をおこすプロ」であった。中共が指導する革命戦争で、農民は主力軍として最も貢献が大きく、党员の中でも絶対的な比重を占めていた。そのため、毛沢東は農民の革命性を高く評価し、農民に高い政治的な荣誉を与えていた。建国後の政治思想分野でも農民の考え方や習性は高い評価を得ており、純粋な無産階級の革命特性であるとの評価を与えられていた²²⁾。

毛沢東は教育制度に不満であること以外に、もう一つの大きな心配があった。それは帝国主義が中国に向けて行おうとしていた「平和的政権交代」の策略である。1953年1月、アメリカのダレス国務長官が、社会主義国家で「奴隷のようにこき使われている人民」を「解放」させ「自由な人民」となるべきであり、「解放は戦争以外の方式を用いて達成できる」との見解を示し、これが「平和的政権交代」戦略と呼ばれた。ダレスは社会主義国家の第三・第四世代に希望を託し、「平和的方法により全中国に自由をもたらす」と公言した。毛沢東はこの種の言論及び社会主義国家との闘争方法の変化には十分に注意しており、1959年中ソ関係の決裂後には「平和的政権交代」の危険性をかなり察知していた。これに対応するためにプロレタリア革命事業の後継者育成の必要性を打ち出し、1964年には正式にプロレタリア革命事業の後継者としての5つの条件を示した²³⁾。

1968年から1969年の大量の知識青年の「上山下郷」の動員に際しては、大量のプロレタリア革命事業の後継者育成のための施策である、との世論を盛んに宣伝していた²⁴⁾。毛沢東は農村の厳しい環境と肉体労働は、青年の思想を改造して鍛え上げ、自分のような革命者を生み出すことに有利であると考えていた。

三、知青の心の中にある「結び目」にも似た忘れ難い複雑な情感

知識青年は中国社会の中で非常に独特な集団であり、同時に特殊な世代(ここで指すのは「老三届」の世代)でもある。通常であれば、青少年たちが中学高校を卒業した後は、それぞれの異なる道を歩み、成功する者もあればそうでない者もいて、お互いの距離は次第に離れていくものである。しかし、「老三届」世代は異なった。毛沢東の指示により1968年末から1969年始めにかけ400万人の「老三届」が「根こそぎ全員」的に農村に送られ、当時は「一面の赤(一片紅)」と呼ばれた。つまり男女の違い・紅五類と黒五類²⁵⁾の違い・「文革」中の造反派と保守派の違い・共青团と非共青团の違い・重点(エリート)中学と一般中学の違い・在学時の成績と政治的表現の優劣の違いといったものは一切関係なく、皆が一律「平等」に農民となったのであった。

「上山下郷」運動はこれら都市の学生たちを同じスタートラインに立たせることとなり、彼らは農村という大「教室」でつく苦しい労働をこなし、農民による「再教育」を受け、思想の改造に努めることとなった。実際、「老三届」が文革前に受けてきた教育では、臆病・ものぐさ・甘え・軟弱・享楽といったものを恥だと見なすようになっており、彼らは自覚を持って自己の苦勞に耐える資質を磨こうと努力した。「上山下郷」後の彼らの苦勞に耐える精神は地元の農民たちを驚かせ、それはあらゆる農民が認めるものであった。「老三届」の知青たちは、その後の知青より質が良く、苦勞に耐え地元農民たちと良好な関係を築きあげた。彼らの中には多くの「鉄の少年」「鉄の少女」といった若者が出現し、多くの青年たちが防災や救出、生産隊の物資を守るため、時には一匹の羊や電信柱を守るために最も貴重な青春と命までもを差し出した。当然ながらすべての農民が勤勞だとは限らないし、誰もが公正無私だとは限らない。しかし知青たちの私心のない姿は多くの農民をして自己とは比べものにはならないと思わせたのであった。

知青たちが艱難を共にする期間もそう長くはなく、二・三年後には「分流」が始まった。つまり農村を離れる現象の開始である。最初は、労働者の募集・学生の募集・徴兵という方法が知青が農村を離れる主な経路であり、これが所謂「兩招一征」と呼ばれたものである。70年代の初め、生産は若干上向きとなり、工業生産も少しずつ回復を見せてきており、工場も知青の中から新労働者を募集するようになった。その後の数年で数百万人の知青が都市部の仕事が分配された。勿論、彼らは出身都市に戻ったわけではなく、特に省を跨いで「上山下郷」に行った北京や上海・天津といった大都市の知青たちは多くが当地の都市や県の下の市の工場に、小さいところでは人民公社の工場に分配されたのである。これ以外に「文革」の10年間で農村から軍隊に入った青年は42万人近くにも上る。筆者はここで大学の「学生募集」を重点的に紹介してみたい。

大学に進み造詣を深めることは曾て多くの青年学生の奮闘目標であったが、「文化大革命」の烈火はその美しい理想を灰と化してしまった。思いがけないことに、1970年大学が学生募集を再開するとの知らせが伝わってきた。それは、党中央がまず北京大学・清華大学で試験的に学生募集を行い、その後少しずつその他の大学に拡大していくという内容を許可したものであった。新しい規程に基づき、募集学生の条件として下記の条項が掲げられていた。「政治思想が良好で健康な、3年以上の実践経験をもつ20歳前後の中学以上の文化程度を有する労働者・中下層農民・解放軍兵士と青年幹部であること。特に「上山下郷」と「回郷」の知青からの募集に留意すること。」過去の大学生と区別するために、これらの学生は「工農兵學員」と呼ばれている。同時に新制度では過去の統一試験と成績優秀者から学生を募集する方法を廃止し、「自己志願、大衆からの推薦、指導者の許可と学校の再審査をそれぞれ合わせた方法」に改められた。1970年から1976年まで合わせて七期の工農兵學員が募集され、合計94万人に上ったが、そのうち農村に下った知識青年がどのくらいいたのかは知る由もない²⁶⁾。大学に入る以外、その他に「中専・中技（技術学校）」に入学した知識青年も一部見られた。募集方法と条件は大学のそれとほぼ同じであった。

学生募集に際し「大衆からの推薦、指導者の許可と学校の再審査をそれぞれ合わせた方法」が採られたことで、「職権」を利用し、「裏口」に手を回す人々に大いに便宜を図る場合が多く見られた。知識青年のいた農村では、県や人民公社の幹部の子女は「有利な位置にいるものが得をする」、

又は親が大幹部である知識青年もそれぞれコネを探すという状況であり、「工農兵學員」として大学に進むには「裏口」が主流をなすようになった。というのも「大衆の推薦」は形式的にすぎず、「指導者の許可」こそが決定権を持つためであった。例えば四川省のある人民公社では、「推薦」者の名簿が1980年分まで一杯であり、名簿のすべてが幹部の子女又はその親戚の子女であった²⁷⁾。

「文革」中に大学に入った「工農兵學員」は「工農兵大学生」とも呼ばれた。ある文革史の研究者によると、試験による選考を経ていないために彼らの基礎知識レベルはまちまちであり、全体的レベルは低いものであった。勿論、中には比較的高レベルの学生もおり、「文革」終了後直接大学院に進み造詣を深めた者もいたのは事実である²⁸⁾。

1970年、一部の都市では知青のために「病氣帰還」「困難帰還」の手続きを採り始めた、例えば北京市である。1973年になると、知青政策の実施に伴い「病氣帰還」「困難帰還」の名目で都市に戻る知青の増加が顕著になった。所謂「病氣帰還」「困難帰還」とは、比較的重い病氣又は障害を持つようになり農業に従事できない場合、及び家庭上特殊な問題（一般的には一人っ子や父母のもとに子女がいない場合を指す）のある知青が、もと居住していた都市に帰ることを認められることを指す。「病氣帰還」「困難帰還」には病院の診断書等の各種証明書類が必要であり、開始時には審査が厳しいものであったが、あとになるほど審査は緩くなった。この方法は前述の「兩招一征」により農村を離れることのできなかった知青にとり、手早く都市に戻るための近道となった。

文革終了後の1977年に大学入試が復活し、1977年と1978年の二期の大学入試で約35万人の農村にいた知青が大学に入学した。

1978年国は「上山下郷」政策の大きな調整を行った。つまり、大部分の中学卒業生は都市部に残り仕事の分配を待つことが認められたことである。併せて農村では経済改革が始まり、「責任請負制」が実施され、土地を農民に分配するようになったために、農民は知青を追い出すようになり、農村にまだ残っていた800万人の知青たちに動揺が走った。その結果として全国的に知青の「帰還ブーム」が起こったのである。1979年前後、全国21の省・市・自治区で「上山下郷」知青の「都市への帰還」を要求する集会・デモ・請願・陳述事件が次々と起こった。最終的に政府はすべての知青の都市帰還を認めることとなったのだが、十年一夢、また原点への振り返り

であった。これを歴史上「大返城（大規模な都市への帰還）」と呼ぶ²⁹⁾。

「知青」たちが都市に戻った後、あらゆる手を使って仕事を探したのも束の間、まもなく改革の大波に飲まれることとなる。企業は大量に人員削減を行い、知青の中でもリストラされる者あり、自分で起業する者あり、その境遇は千差万別であり、またもや辛酸をなめることとなったのである。前述の内容をまとめると、知青たちの落ち着き先は大体下記の通りである。少数が大学に進み、その人々は「文革」中に進学した「工農兵大学生」と文革後大学入試再開後に合格して進学した大学生に分けることができる。前者は全体的な文化レベルは低いとはいうものの、政治的条件（紅五類の家庭出身であり、本人が共産党員であること）に優れていたため、少なからずの知青が各級の指導者になっていった。その地位は部長・局長が多く、中にはかなり上の役職まで上り詰めた者もある。また、後者は多くが学術研究の道に進み、専門家としての仕事に就いた者が多い。しかしほとんどの知青は労働者や一般職員となり、中には職が見つからず自分で活路を探し出していかねばならぬ者もいた。知青の中で事業や商売に成功し財を成した者は極めて少ない。要するに、十年の奮闘を経て後、知青たちは再度新しい転換に向き合うこととなり、再度社会の異なる側面・異なる位置に帰ることとなったのである。しかしこの時既にこの世代の青春は消耗し尽くしてしまっていた。

「老三届」知青はかつて祖国の花であり最も幸福な世代であると思われていた。ところが実際には彼らは運の悪い世代であり、不幸な世代であると言わざるを得ない。フランスのミシェル・ボニン（Michel Bonnin）は彼らを「失われた世代」と名付けた。彼らは学業が中断され、失業し、青春までも失った世代であり、ある者は結婚の機会を逃しやむなく独身のままであり、人生のすべてが悲劇としか言いようがない者もいる。「老三届」の先輩世代にも不幸な人々はあるが、それはその世代の一部分にすぎない。ところが「老三届」は世代すべてが苦難に遭遇し不幸に見舞われたのである。知青世代は個性・資質・家庭背景がそれぞれ異なるが、かつて知識青年であり、自分の生まれた都市や父母から遠く離れて社会の最下層に入り、厳しい農村で重い労働に従事したという経歴が、彼らの間に一種の「同じ運命で苦勞を共にした」という、戦争中の「戦友」にも似た連帯感を持たせ、知青世代特有の一体感を持たせているのである。「知青」という身分はあたかも一枚の名刺のようである。元々お互いに知らぬ仲であっても「知

青」の2文字を言っただけで、その瞬間に距離が縮まり親しくなり、高齢となった今でもそれは変わらない。知青たちは熱心に昔をなつかしみ、頻りに座談会を開き回顧展を催し、ツアーを組んでは当時苦難を味わった農村に行つてはその農村を「第二の故郷」と親しげに呼ぶのである。彼らが過去を語る時、なんとも言い難いある種の荣誉感と誇らしげな感情が生まれるようだ。このような理解できない挙動と感情は、この世代特有の「知青のこだわり」とも言えるものである。中国では過去に苦難を受けた世代は少なくないが、他の世代には知青世代のような「こだわり」は見られない。例えば、「右派分子」に「右派としての思い」は見られない、下放された幹部に「幹部学校への思い」は見られない³⁰⁾。「知青」だけが「切ろうとしても断ち切れない」思いを抱いているのである。それはおそらくこの世代は青年時代をすべて「上山下郷」運動に捧げてしまったからだと考えられる。一種の重大な損失と犠牲を払ったのではあるが、彼らはこれを「貢献」と呼びたがる。彼らが懐かしみ追い求めるのは、まさに逃した青春の夢なのである³¹⁾。現在、「老三届」知青世代は高齢者の中でも最も活発な世代であり、当時の紅衛兵の力は一向に衰えず、合唱や踊り、集まりや公演開催といった活動を盛んに行っている。彼らは青春を取り戻し、もう一度青春時代を過ごしたいと思っているかのようだ。多すぎる情緒を解き放ち、大きすぎる「知青としての思い」をほどこぎ、沢山の事を世間の人々に伝えるべく心の声を文にして発したい、これが知青たちが筆をとり文章や詩を書き上げ、出版していった理由であろう。

知青関連の回顧文や書籍は多種多様で盛観をなしており、「中国知青図書要目」だけでも2672種を収録している。知青研究家の劉曉航氏によると、全国の知青が書き出版した回顧録はおそらく一万種類に近いということである。「要目」は年別と形式別に配列されており、1950-1965年に100種類、1966-1981年の531種類、1982-2000年に436種類、2001-2012年に870種類、2013-2018年に735種類となっている。知青文化熱は90年代に始まり、「要目」から見るところでは、21世紀に入り、知青関連の図書数は八・九十年代を遥に越えており、ピークは2001-2012年と2013-2018年の時期であったということであり、知青熱はどんどん増していることがわかる。歴史上ある世代がこのように沢山の回顧文章を著し、一人の青春の足跡を残すということは無かったことである。「要目」は多くの出版社から出た知青関連書籍名を収録し、さらに多くの知青関連の出版物や図書番号のない自

費出版の書籍名も収録している。県や農場などの職場名義で出版している知青回顧録もあれば、個人が編纂した回顧録もあり、どれも当事者の角度から自分の物語を述べ、歴史を残し、後世に真相を知らせ、教訓をまとめた貴重な歴史資料とも言える。

知青たちは回顧録に一体何を書いているのか？ 今、筆者の机上には知青の友人から贈られた著作「図説北大荒」³²⁾が置いてある。この本は当時の写真を媒体として知青の物語を述べたものである。一枚の写真に一本の文章がつき、背後の物語を紹介し、上海知青が黒竜江北大荒で刻苦奮闘する過程を描いている。全書八章から成り、108枚の写真とその物語である。八章の名前は、「千里を越えて辺境へ」「犁の下の春の色」「汗をさらした黒土地」「辺境を守り国を守る」「生活の味」「新文化が開く」「竜江の青年」「歳月が深情を映す」となっている。各章の名前から大体の内容が読み取れる。上海を離れ遠く黒竜江へ赴くところから始まり、堅い決意で上山下郷に申し込み、黒土地で農業に従事し、中ソの珍宝島事件に参加し、生活のエピソードや農村での科学文化の伝播、辺境に根を下ろし家庭を築く等々の物語が書かれている。一つ一つの物語の主人公はどれも積極的に向上したいという精神に満ちており、消極的な若者は一人もおらず、読む者をして遥かな凍てつく辺境の地は決して「苦しい」ところではなく、むしろ喜びに満ちた場所であるかのように思わせてしまう。この本の作者はまさにそのような人間であり、彼は前書きの中で深い情を込めて「自分は書くことを非常に愛している、最も意義深かったのは知青時代に宣伝幹事を担当したことであり、最も嬉しかったのは自分の書いた文章が皆に読まれることであった」「特に定年後は、キーボードが自分を知青時代の宣伝幹事の頃に戻してくれたような気がして、上海に戻った後技術職についたために中止してしまった執筆を一気に取り戻したい気持ちで一杯だ」「知青は自分が最も熟知した生活である。あの十年の青春歳月が自分に焼き付けた印はあまりにも深い、骨に刻むほど深い、上海に帰ってからの三十年の経歴も上山下郷が自分にくれた複雑な心境を打ち消すことはできないのである」と書いている。行間から作者は確かに北大荒を深く愛していることが読みとれる、そしてその充実感はとても大きく、後書きには「この本の編集は青春の魅力を味わう過程であった」「青春は既に過ぎ去ったが、最も追想に値するものである」「すでに黄色くなった昔の写真を見る時、当時的一幕が今でも目の前に現れる」「今日、我々の青春は無限の魅力を持つ

ていたことがますます顕著になっている」「私は青春に感謝し、北大荒に感謝する」と述べている。なぜこんなに多くの知青たちが回顧録を書くのか、筆者はこれを読んで一気に謎が解けたように感じた。元々彼らは自分たちの青春にこのように未練を持ち、自分の青春を書き残したいという衝動に駆られていたのだ！ 同時に筆者は思わず「彼らはなぜ都会に戻ってきたのだろうか？」と疑問に思わずにいられなかった。作者と本の中の大部分の物語主人公の言行から見て、本来は都会に戻りたくないのだが、大勢の仲間が帰るというプレッシャーに屈し「やむなく」都会に戻ったとしか解釈できない。というのも作者は「苦しい帰還の道」の中でこのように述べている。『元々「良い若者の志はどこにでもある」ように理想の為にすべてを捨てて他郷に赴くのは古代から少くはない』『もし「(上山下郷)運動」が「志願」に、「再教育を受ける」が「三大差を縮める」³³⁾に取って替わっていたのであれば、私たちの世代にもっと多くの邢燕子や董家耕式の人物(邢燕子や董家耕は五十年代農村に根をおろした知青の先進人物)が現れたであろう』。これは意味深長であり、作者は元々「志願」して北大荒に「三大差を縮める」という理想のためにやってきたのだが、「再教育」される立場では農村に根を下ろす訳にはいかず、又その後止む無く理想を捨て都会に戻るのだ、ということ漏らしている。ということは、政府は1968年に上山下郷動員方針政策のスローガンを間違えたということになる。全書を通読してみると、物語の主人公たちの思想はどれも大同小異であり、個性に欠けている。作者は収集した何千枚という写真をふるいにかけてのだろうか、それともその年代の青年たちは元来そうだったのだろうか？ 作者は北大荒の軍墾農場で宣伝幹事を務めたということであるが、本書の文字からその年代の宣伝口調が今でも感じられる。

知識青年は皆この本が描写しているような人物のようだったのだろうか、筆者は勝手に断定できないが、まるで同じ型から作られたかのようである。この現象からいくつかの問題提起をしてみたい。

まず、知青の上山下郷期間、知青の中にはずっと所謂「根を下ろす派」と「根を下ろすのを信じない派」の間の闘争があった³⁴⁾。そして都会への帰還後、「青春に後悔無き」と「後悔有り」の争論が爆発した。争論の焦点は、青春を農村に捧げたことを後悔するか否かである。「文革」中に「文革」前のすべての制度、特に劉少奇により定められた一切の制度は否定されたが、知識青年の上山下郷政策だけは否定されなかった。「文革」後の

秩序を取り戻す過程の中で、文化大革命中に出現した多くの「新しい事物」が否定されたが、上山下郷運動という「新しい事物」だけは否定されなかった。最近、更に多くの学者が理論的文章の中で上山下郷運動は文化大革命の産物ではなく、中共の第一代指導者集団が早くから決定していた政策であり、否定は許されない、との見解を述べている。これに対し一部の知青はどうしても納得がいかに「なぜに？」という思いを抱いている。

近年来、社会では興味深い問題が論争されている。それは、一体老人が悪く変わったのか、又は悪者が年老いたのか？という論争である。これは、年をとっても尊厳を持たず、不道德な行為を行う老人の出現に起因する。例えば、わざと自分で転び、それを助けようとした人を「この人が自分を押しした」と罪をなすりつけ賠償を得ようとするというものである。これらの老人は丁度、知青の世代であり、おそらく知青であっただろう。知青が農村で受けた「再教育」とは一体どのようなものであったのだろうか、と疑問がわく。結論からいうと、彼らが農村で身に付けた社会経験や人生経験とは、農民のきわめて不良な風習や癖であったということであり、又それを都市に持ち帰ってしまったということである。これに対し知青研究者の定宜庄は鋭い分析をしている。定氏は「老三届」世代が人文科学・社会科学方面で学んだ知識はもともと相当支離滅裂であり、相当に愚かで無知であるが故に容易に盲従する。又人によっては悪賢く腹黒く、不誠実であり、密告が得意で他人を陥れるとも述べている。そして、上山下郷により多くの優秀人材が発展の機会を失い、国家のこの世代のエリート集団の素質は全体的に低下したとまとめている³⁵⁾。

筆者が目にしたことのある知青回顧録は、上山下郷運動を反省し、批判し、否定するものはほとんど無い。「図説北大荒」のように「誇らしい」感情を持って書かれたものが多く、苦しさを述べたものであっても「革命楽観主義精神」を帯びた「訴え」にすぎない。これは知青世代が10年の苦難を経ても「絶対に後悔せず」、大多数の知青が紅衛兵の「素地」を保持していることの証明に他ならない。知青世代は中国の上を受け継ぎ下へ伝える世代であり、彼らが持つところの特質は世界各国の戦後世代が持つそれとは大きく異なっている。それは彼らの下の世代への伝えられ、今後相当長い時期に渡り中国社会へ影響を与えていくものである。現代中国を研究するにあたり、「紅衛兵—知青—工農兵大学生—各級の党や行政の指導者」の世代及びこの一連の繋がり内の内在的な関連を避けて通るわけには

いかないのである。

上述のこれらの現象については、筆者はまだ思考中であり結論を出せていない。

注

- 1) 『現代漢語詞典』(第5版)、中国社会科学院語言研究所辭書編集室編、商務印書館、2005年、p. 1746
- 2) 定宜庄『中国知青史—初瀾(1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、前言 p. 2
- 3) 同上
- 4) 定宜庄『中国知青史—初瀾(1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 429
- 5) 王年一『大動亂的年代』、人民出版社、2009年、pp. 201-202
- 6) 劉小萌『中国知青史—大潮(1966-1980)』、中国社会科学出版社、1998年、pp. 105-106
- 7) 定宜庄『中国知青史—初瀾(1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 450、p. 459
- 8) 定宜庄『中国知青史—初瀾(1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 431、p. 477
- 9) 劉小萌『中国知青史—大潮(1966-1980)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 167
- 10) 定宜庄『中国知青史—初瀾(1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 44、p. 84
- 11) 毛沢東「在延安文艺座谈会上的讲话」、『毛沢東選集』(第3卷)、人民出版社、1991年
- 12) 毛沢東「五・七指示」を参照、王年一著『大動亂的年代』、人民出版社、2009年、pp. 3-4
- 13) 毛沢東「在一个乡里进行合作化规划的经验」の書面指示、定宜庄『中国知青史—初瀾(1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、pp. 9-10
- 14) 毛沢東「关于正确处理人民内部矛盾的问题」、『毛沢東選集』(第5卷)、人民出版社、1991年、p. 397
- 15) 定宜庄『中国知青史—初瀾(1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 158
- 16) 薄一波『若干重大决策与事件的回顾(下)』、中共党史出版社、2008年、p. 818
- 17) 楊繼繩『天地翻覆』(上卷)、天地圖書有限公司、2016年、p. 232
- 18) (仏) Alain Roux『毛沢東伝』、中国人民大学出版社、2014年、(口) Alexander

- V. Pantsov 『毛沢東伝』、中国人民大学出版社、2015年
- 19) 定宜庄 『中国知青史—初瀾 (1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 276、p. 443、p. 467
 - 20) これら毛沢東の3本の教育改革「最新指示」は、劉小萌 『中国知青史—大潮 (1966-1980)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 138、p. 219を参照。
 - 21) 劉小萌 『中国知青史—大潮 (1966-1980)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 137
 - 22) 高華 『歴史筆記』(1)、牛津大学出版社、p. 506
 - 23) 薄一波 『若干重大決策与事件的回顧 (下)』、中共党史出版社、2008年、p. 800、p. 815
 - 24) 1968年11月26日「人民日報」の評論「帶好知識青年是貧下中農的光榮職責」の中で中下層農民による知識青年への再教育を行うことを「プロレタリア独裁のもと革命の継続に必要であり、プロレタリア革命事業の後継者育成に必要である」と述べている。これは劉小萌著『中国知青史—大潮 (1966-1980)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 221からの引用による。
 - 25) 紅五類とは革命軍人・革命幹部・革命烈士・労働者・中下層農民を指す。黒五類とは地主・富裕農民・反革命分子・悪人・右派を指す。彼らの家庭と子女も「紅五類」と「黒五類」と呼ばれ、紅五類は社会で優遇を受け、黒五類は差別を受けた。
 - 26) 劉小萌 『中国知青史—大潮 (1966-1980)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 482
 - 27) 劉小萌 『中国知青史—大潮 (1966-1980)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 483
 - 28) 北京大学教授・文革研究者の印紅標の研究による。『中共不想說的文革』、哈耶出版社、2016年、p. 281-282
 - 29) 劉小萌 『中国知青史—大潮 (1966-1980)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 723
 - 30) 毛沢東の「五七指示」に従い農村に「五七幹部学校」が設置され「五七幹部校」と呼ばれた。多くの党や行政の幹部や知識人が五七幹部校に下放され、労働を通して思想改造を受けた。
 - 31) 定宜庄 『中国知青史—初瀾 (1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 481
 - 32) 『図説北大荒』、中国文化出版社、2019年
 - 33) 都市と農村・労働者と農民・頭脳労働と肉体労働の間に存在する差別を指す。
 - 34) 錢理群 『燭火不息 (上卷)』、牛津大学出版社、2017年、p. 331
 - 35) 定宜庄 『中国知青史—初瀾 (1953-1968)』、中国社会科学出版社、1998年、p. 421、pp. 435-438

Comment on the Growing Emergence of Memoirs
of China's Educated Youth:
Commenting Pictorial Essays
on the Great Northern Wilderness in Passing

WANG, Youmin

It has become a social phenomenon that more and more China's educated youth are writing memoirs in recent years. Hundreds of thousands of such collected works have been published up to now, establishing a kind of its own in Chinese literature.

Since the Cultural Revolution was over, huge amounts of unjust cases have been rehabilitated and many who were persecuted in previous political movements were liberated. Quite a number of them have published memoirs to tell their experience and to record history. Two types of memoirs are particularly notable. One is the memoirs of common people who suffered persecution, which is called "right wing memoirs" in this article. The other is the memoirs of elder comrades who had held certain leadership positions, addressed in this article as "veteran cadres memoirs". These two types of memoirs respectively reflect the status of two important groups in Chinese society, and have gathered a unique group of memoir authors.

Memoirs written by China's educated youth emerge as the third kind of collective memory, showing the historical status of another important social group. "Right wing memoirs" and "veteran cadres memoirs" are mostly written by famous people, whose works drew much attention and attracted many readers once published, and would be regarded as important reference documentation by academic professionals. But the educated youth authors are usually grassroots, and their memoirs have not attracted enough attention in academic research. In view of this, this article intends to use the memoirs of educated youth to interpret the history of the educated youth movement to the countryside, describe the status of the educated youth in the post-educated-youth-era, and explore the huge influence that the educated youth generation have had and will have on the trend of Chinese history.